

「二」次の文章は久生十蘭作「黄泉から」の一部である。美術史の研究のためフランスに渡った（魚返光太郎）は、戦後、美術品の仲買人として日本に帰ってきた。お盆の入りである七月十三日、フランス語の私塾でお世話になった（ルダン）と再会し、その中で光太郎の唯一の親類である（おけい）の話になる。おけいが一途に光太郎を好いていたこと、そして、光太郎に「自分の友達の中から良い人をお嫁さんに推薦する」と話していたことを聞き、おけいへの甲斐の準備を始める。以下はそれに続く話である。よく読み、後の各問いに答えなさい。

写真でもと思つて、探してみたが一枚もない。八年前、ヨーロッパへ発つとき、ひつかりになっていた芸者の写真といっしょに焼いてしまったような気もする。

手も足も出なくなつてぼつねんと椅子にかけて蟋蟀の鳴く声をきいていると、これでもうこの世にひとりの肉親もないのだという孤独なおもいが胸にせまり、じぶんにとつておけいは、かけがえのない大切な人間だつたことがつくづくとわかつてきた。

いまさらかえらぬことだが、じぶんにもうすこしやさしさがあつたら、おけいをパリへ呼びよせていたろうし、そうすればニューギニアなどで死なせることもなかつたわけで、いわばじぶんの冷淡さがおけいを殺したようなものだった。

おけいが肉体のすがたをあらわすとは思わなければ、来たなら来たでなにかしらおとずれがあるはずで、光太郎の感覚にそれがふれず、にすむわけではないのだが、バルコニーからそよそよと風が吹きこむばかりでなにひとつそれらしいけいは感じられなかつた。

「どうして、どうして」

ピアノの上にしらじらしく立っているワインの瓶や、生気のない皿のカナツペをながめながら、光太郎はじぶんの虫のよさに思わず苦笑した。

ルダンさんのところはどうかろうと思つてバルコニーに出てみると、食堂の窓からあかあかと電灯の光が洩れ、もう宴会がはじまつたのだとみえ、ルダンさんが上機嫌なときに弾くまじいピアノがきこえていた。

光太郎のうちほもと銀座の一丁目であつて、おけいの家は新堀にあつた。

おけいは父の五十五の齢に産れたはじめての女の子だつたが、上の三人はみな早く死んでいたもので、そのよろこびかたといつたらなく、一家中気がちがうのではないかと思われたほどだった。

そのころ堀川はまだまださかんなもので、派手堀川といわれた先代がまだ生きていて、福井楼へ百人も人を招んでさかんな帯夜の祝いをした。芸者の数だけでもたいへんなものだ。その夜の料理は一人前四百円についたといつたので評判だった。

たぶんおけい六歳ぐらいのことだった。光太郎が堀川へ遊びに行っているとおけいの父の新造が、きょうおけいとお月見をしますが、あなたも誘った。

おけいのお守りに芸者が七人、橋光亭から船をだして綾瀬まで漕ぎのぼると、おけいの父が用意してきた銀の繪箔の扇を山ほどだして、さあ、みなでこれを放っておくれといった。芸者たちが、おもて、みよし、ともとわかれておもいおもいに空へ川面へ銀扇を飛ばすと、ひらひらと千鳥のように舞いちがうのが月の光にきらめいて夢のようにうつくしい。おけいは中ノ間の座布団に坐って父の膝にもたれ、ニコニコ笑いながらながめていた。

こんな育てられかたをしたので、鷹揚なことはこのうえもなく、放っておけば一日でもご飯を食べずにおととりと座っている。けっしてものをねだったり、催促したりしない娘だった。

昭和十年の冬、堀川が自火をだして丸焼けになり、両親は東京を遠慮するといつて鶴沼へひっこんだが、間もなく死んでしまった。おけいは赤坂表町の須藤という弁護士の家へあずけられ、三崎町の仏英和女学校へ通っていたが、水曜日にはルダンさんのところへきてフランス語の勉強をしていた。いまに思うと、光太郎がフランスへ連れて行ってくれるものときめ、その用意をしていたわけだった。

日本を発つ前の晩、おけいは別れにきた。茄子紺の地に井桁を白く抜いた男柄の銘仙に、しみひとつない結城の仕立おろしの足袋というすっきりしたようすでやってきて、おばあさまの琴爪をちようだいといった。

おばあさまの琴爪というのは、琴古の名人だった光太郎の祖母が死ぬとき、これはおけいに、といつて遺したものだ。

光太郎がどうしたんだとたずねると、あなたはもう日本へ帰っていらっしやらないでしょうから、きょういただいておかないと、もういただけなくなってしまうからといった。

「お客さまでございます」

という声が出た。おどろいて顔をあげると女中さんが立っていた。

「だれだい」

「あの、二十三の若いお嬢さまでございますが」

光太郎は、えっといって椅子から立ちあがった。

玄関へ出てみると、眼に張りのある、はっきりした顔たちの、いかにもお嬢さんと呼ぶにふさわしいような品のいいひとが立っている。

「失礼ですけど、こちらさま、もと銀座にいらした魚返さんではございませんかしら」

とたずねた。「――」

光太郎がそうだとこたえると、やはりそうだったわ、とうれしそくに口の中でいった。

居間へ通ると、千代は日本人にしては長すぎる脚を斜めに倒すようにして椅子にかけて、

「あたくし、もと銀座におりました今屋の伊草のもので、千代と申しますんですけど、こんどニューギニアから帰ってまいりましたので、おけいさんのこと、すこしお話しもうしあげたいと思って、それで、お伺いしましたのよ」

若々しい、そのくせよく練れた落ち着いた声でそういった。

「それはどうも、ごしんせつにありがとうございます。おけいの霊代もありませんので、こんなみようなことをやっておりますが、お差しつかえなかつたら、どうかゆつくりしていらしてください」

「ありがとうございます。じつは帰りますとすぐにおたずねしたかったですけど、こちらさまのお住居がわからなかつたものですから」

「今屋さんの建物は、むかし銀座の名物でした。明治初年ごろの古い洋館で、油絵具をはじめ輸入なすつたので、よくおぼえております。それで、おけいとはニューギニアで、いつごろ」

「おけいさんはすぐカイマナへ行かれたのですけど、あたくしどもはさんさん追いつめられ逃げこんだので、おけいさんにお逢いしたのは終戦の半年ぐらい前でしたの」

「カイマナというのはどこなところですか」

「帰りましてから、ジイドの『コンゴ紀行』を読んでそう思いましたんですけど、あの中（バンギとノラ間の大森林）という章の描写にそっくりなのよ……」

見あげると眩暈めまいのするような巨木きょぼくが一行になつて歩き回つてると書いてありましたけど、ちょうどそんな感じのところなんですの」

「わかるような気がしますね」

「あたしたちの仕事は、それは辛いんです。半年の間、毎日滝のように降りつづけていた雨がやんで雨季があげますと、急に温度があがるので、活字が膨脹してレバーであがつてこないのに印字ガイドまで狂つて、どうしたつてミスばかり打つんですの……ちようどバボ作戦の最中で、作戦関係の文書はみな暗号ばかりですから、五日がかりでしあげた大部なものでも、一字でもミスがあれば打ちなおしを命じられます。それはまるで命をけずられるようなひどい明け暮れで、あたくしどもは宿舍へ帰ると、もうなにをする元気もなくてすぐ横になつてしまふんですけれど、おけいさんは池凍帖いけもちょうを置いてお習字をしたり、お琴をひいたり、ひとりでのたのしそくに遊んでいらつしやいましたわ」

「琴って、十三絃のあの琴のことですか」

「ええ、そうなんですの。病室の衛生兵に秋田というひとがいて、これは京都の有名なお琴師さんだそうで、おけいさんの部屋に琴爪があるのをみつけて、そんなら琴をつくってあげようといつて、あのへんのラワンやタンジュールなどという木で琴をつくってくれましたの。甲におもしろい木目のある本間の美しい琴でしたわ」

「そんなこともあるのですか。かんがえもしませんでした」

「あたくしたち、夜直でおそくなって、月の光をたよりに帰ってきますと、ジャングルの奥から「由縁」なんかきこえてきますと、なんともいえない気持ちがい었습니다わ」

光太郎は下目に眼を伏せてきいていたが、玲瓏と月のわたる千古の密林を洩れる琴の音は、どんなに凄艶なものだろうと思つて、あつたに、あの琴爪で琴をひいておけいのようなすが眼に見えるようふと肌寒くなった。「Ⅱ」

「おけいさんはあんな方ですから、なにもおっしゃらなかつたのですが、そのころはもうだいたいお悪かつたのです。終戦のすこし前でしたが、雨に濡れてお帰りになつてたいへん咯血なされると、ずんずんいけなくおなりになつて、病室へ移すとまもなく危篤といふことになりました……それで、あたくしみなさんを代表してお別れにまいりますと、枕元に『謡曲全集』なんて本が置いてありますので、こんなものお読みになるのとたずねますと、ええ、ほんとうにいいコントばかりよ、すばらしいと思うわといつて、「松虫」のはなしをはじめ、枯野を友とあるいてるうちに、その友がいつの間にか死んでいってしまったところまできますと、だしぬけにふつとだまりこんで、大きい眼でじつと天井を見つめていらつしゃいますのよ。どうしたのだろうと思つて顔をみてみますと、ちつとも眼ばたきしないようなので、おけいさん、おけいさん、どうなすつたのと大きな声をだしますと、おけいさんは夢からさめた人のような眼つきであたしの顔をぐらんになりながら、面白かつたわ、あたしいまバリへ行つて来たのよとおっしゃるの……そう、どんな景色だつて、とたずねますと、あれはマドレーヌといふのでしょつ、太い円柱が並んでいるお寺の前の道を、光太郎さんが煙草を吸いながら歩いてたわ、とそんなことをおっしゃいました」

「それは、いつごろのことですか」

「六月二十七日。お亡くなりになる朝のことでした……日が暮れて、いよいよ臨終が近くなると、なんともいえない美しい顔つきにおなりになつて、あたし「松虫」は文章がきれいだからすきなよ、とおっしゃつて、いい声で上げ歌のところを朗読なさいました。

そこへ部隊長がいらして、ご苦労だった。こんなところで死なせるのはほんとうに気の毒だ。お前、なにかしてもらいたいことはないか。遠慮しないでもいいなさい。どんなことでもいい、といわれますと、おけいさんは、では、雪を見せていただきますとおっしゃいました。

雪……雪って、あの降る雪のことか。ええ、そうですわ。これは困った、神さまでないかぎり、ニューギニアに雪など降らせられるわけはなからうじゃないかといえますと、おけいさんは笑って、冗談ですわ。内地を発つ晩、きれいな雪が降りましたので、もういちど見たいと思つたのです、とおっしゃいました。

そのとき、軍医長が部隊長になにか耳打ちしますと、部隊長は眉をひらいたような顔つきになって、じゃ、そうしようといっておけいさんを担架に移して下の谷間のほうへ運びました。

あたくしたち、なにがはじまるのだろうと思つて担架について谷間の川のあるところまでまいりますと、空の高みからしぶきとも、粉とも、灰ともつかぬ、軽々とした雪がやみまもなく、チラチラと降りしきって、見る見るうちに林も流れも真白になって行きます。

部隊長はおけいさんに、さあ、見てごらん。雪を降らしてやつたぞと高い声でいわれますと、おけいさんはほんやり眼をあいて、雪だわ、まあ美しいこととうつとりとながめていらつしやいましたが、間もなく、それこそ眠るように眼をとじておしまいになりました」

「その雪というのは、なんだつたのですか」

「ニューギニアの雨期明けによくある現象なんだそうですけど、河へ集まつてきた幾億幾千万とも知れないかけろうの大群だつたのです」

「ありがとうございました。これを聞けなかつたらなにも知らずじまつたところでした」

といつているうちに、この家をだれから聞いたろうとふしぎになって、

「この家はながらくひとに貸してあつたのを、つい一昨日明けさせて越してきたばかりで、どちらへもまだ移転の通知をしてありませんが、よくここがおわかりになりましたね」

というと、伊草は光太郎の顔を見ながら、

「ええ、あたくし、きょうこの先の宋林寺へお墓まいりにまいりましたのよ。いつも六阿弥陀のほうから帰るのですが、きょうはなにげなく長明寺のほうへ曲りますと、すっかりわからなくなつて、このへんをいくどもぐるぐる回っているうちに、ふと見るとお宅の表札に魚返と書いてありますでしょう。いちどおたずねしなければと思つておりましたもんですから、ふらふらと玄関へ入つてしまいましたのよ。でも、かんがえてみますと、ずいぶん頓狂なはなしね。あたしいやだわ」

といつてうつすらと顔を赤らめた。【Ⅲ】

急に別な眼になつてそのひとを見なおすと、いままで気のつかかなかつたいろいろなよさがだんだんわかつてきた。

月の光を浴びたような無垢な皮膚の感じも、張りのある感覚のよくゆきとどいた深い眼の表情も、健康そうな生の唇の色も、どれもみない

つかおけいに話してきかせた光太郎の推賞する科目だった。薄い梔子色の麻のタイユウルの胸の髷のようなものは、よく見ると、大胆な葡萄の模様を浮彫のように裏から打ち出したもので、葡萄の実とも見えるガーネットの首飾りと照応して、日本ではたいていの場合みじめな失敗に終わるバロック趣味を成功させていた。

伊草の娘が帰ると、光太郎はそのまま玄關に立って腕を組んでいたが、おけいはこれからルダンさんのところへ行くだろうと思うと、せめて門までも送って行ってやりたくなくなった。

「提灯をつけてくれないか」

女中がおどろいたような顔をした。

「さあ、提灯は……懐中電灯でいけませんか」

「いや、提灯のほうがいい」Ⅳ

光太郎は提灯をさげてぶらぶらルダンさんの家のほうへ歩いて行ったが、道普請のくずれのあるところへくると、われともなく、

「おい、ここは穴ぼこだ。手をひいてやろう」といって闇の中へ手をのべた。

【語注】※1福井様……料亭の名前。

※2おもて、みよし、とも……「おもて、みよし」は船の前の部分、ともは船の後方を指す。

※3鷹揚……ゆったりとして上品なこと。

※4井桁……井戸の井の形。

※5銘仙……平織の絹織物の一種。

※6結城……結城紬のこと。茨城県結城市や栃木県小山市など鬼怒川沿いの地域で生産される伝統的な絹織物。

※7明け暮れ……毎日。

※8池凍帖……普道の手本書の一種。

※9頓狂……だしぬけに、その場にそぐわない調子はずれの言動をすること。

※10道普請……道路を直したり、建設したりすること。

問一 次の文は本文中より抜き出したものである。どこに入れるのが最も適切か、本文中の「Ⅰ」「Ⅳ」の中から一つ選び、その記号をマークしなさい。

光太郎は、おけい光太郎のお嫁さんはじぶんの友達を推薦するといっていたという、今朝のルダンさんの話を思いだし、この娘をここへ連れてきたおけいの意志をはっきりと理解した。

- ① Ⅰ                    ② Ⅱ                    ③ Ⅲ                    ④ Ⅳ

問二 — 部アとあるが、「虫のよさ」とはどういうことか。最も適当なものを次の中から一つ選び、記号をマークしなさい。

- ① おけいに対して自分の好意を伝えられなかったため、おけいの死後もその機会をうかがっているということ。  
② おけいの意志を無視したのに関わらず、もう一度会って話したいと身勝手な考えをしているということ。  
③ 当時おけいと共に過ごしたかったがそうできなかったことに対して謝罪をしたと考えているということ。  
④ 親族が一人もいなくなってしまう自分のためにも、この世に戻ってきて欲しいと願っているということ。  
⑤ おけいに琴を教えられないままになってしまったため、もう一度会って少しでも教えてあげたいと願っているということ。

問三 — 部イについて、この表現はどのような効果をもたらしめるものか。最も適当なものを次の中から一つ選び、記号をマークしなさい。

- ① 美しい風景に吸いこまれるおけいの様子を表し、後のおけいの最期の表情を想像させる効果。  
② 日本の伝統的な美に興味を持つおけいを描き、琴に没頭することが必然であることを表す効果。  
③ おけいが風景とともに光太郎を眺めていたことを描き、おけいの一途な恋心を表す効果。  
④ おけいが育った家柄の良さを示す光景であり、おけいの育ちの良さを強調する効果。  
⑤ ひらひらと空を優雅に舞う銀扇とおけいのおっとりとしたマイペースな人間性を重ねる効果。

問四 — 部ウに使われている表現技法を漢字三字で答えなさい。

問五 — 部エとあるが、おけいはどのような性格と言えるか。「性格」という文末に続くよう、本文中から二五字以内で抜き出しなさい。

問六 — 部オとあるが、このとき光太郎が手をさしのべた理由として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号をマークしなさい。

- ① 家の周辺には街灯が一つもなく、少しでも照らしてあげたいとおけいを心配したため。
- ② 千代の話を聞いた後、本当に自分に必要なはおけいであつたと好意を確認し、後悔の念を抱いたため。
- ③ 自分にとって理想の女性である千代と引き合わせてくれたおけいに対し、感謝の意を表すため。
- ④ 目の前に現れたおけいのはかなげな姿を見て、これが本当に最後の別れであると不安を感じたため。
- ⑤ 死の間際まで自分の姿を浮かべてくれたおけいに対し、ともに歩くことでせめてもの誠意を表すため。

問七 次に掲げるのは、「黄泉から」を読んだ後、「文章Ⅰ」について話し合った生徒の会話である。空欄 

i
---

 に入る内容として最も適

当なものの中から一つ選び、記号をマークしなさい。

【文章Ⅰ】 — 『松虫』のあらすじ

津の国阿倍野あたりの市で酒を売る一人の男が、いつも男たちが連れ立って来ては酒宴を催して帰るので、不思議に思つて、今日は素姓を尋ねようと待っております。やがて男たちがやって来て、主人の振る舞う酒に酔い、詩句などに興じていますが、一人が松虫の音に友を偲ぶと口走るので、主人がその意味を問うと、昔この辺りの松原を二人の仲の良い友が通りかかった時その一人が、松虫の音にひかれて草原に入ったまま不審の死を遂げたことを物語り、自分がその時残された友人であると明かし、今もその友を偲んで松虫の音に誘われて来たのだと言つて去ります。酒屋の主人がこれ聞いて哀れに思つて弔っていると、里人（松虫の音に誘われて死んでしまった男）の亡霊が現れて、昔のことを物語ります。明け方の鐘につれて亡霊は姿を消し、あとには虫の音ばかりが寂しく残ります。



生徒A…バプアニューギニアにいたおけいが好きと言っていた「松虫」はこの作品において、どのような役割を果たしているのだろうか。

生徒B…死に別れてしまった親友二人の話だね。

生徒C…おけいはこの謡曲に何を感じたのだろうか。

生徒B…きつと、

i

生徒A…確かに、それならばおけいの境遇と繋がる部分を感じられるね。

生徒C…他にも色々な解釈があると思うな。皆を巻き込んで話し合ってみよう。

① 死に別れてもなお思い合う二人の関係と自分と光太郎の関係を重ねて、自分が死んだとしても、光太郎に会いに来て欲しいと願っていた。

② 死に別れてもなお思い合う二人の関係と自分と光太郎の関係を重ねて、光太郎にもう一度会って想いを伝えたいと願っていた。

③ 死んだ友人を偲ぶ男と自分を重ねて、自分が死んだとしても光太郎のことは絶対に忘れないと思っていた。

④ 松虫の音にひかれて死んでしまった男と自分を重ねて、死んだ後も自分のことを忘れずにいてくれることをうらやましく思っていた。

⑤ 松虫の音にひかれて死んでしまった男と自分を重ねて、光太郎と共に過ごした日々を思い返し、その幸福を改めて感じていた。